

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4472300484		
法人名	有限会社湯布商事		
事業所名	グループホーム「花の里」		
所在地	大分県由布市庄内町西361番地		
自己評価作成日	平成25年2月10日	評価結果市町村受理日	平成25年5月29日

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	福祉サービス評価センターおおいた		
所在地	大分県大分市大津町2丁目1番41号		
訪問調査日	平成25年2月27日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>○本人の意思、ご家族の希望があれば、かかりつけ医と相談の上、終末ケアに取り組んでいる</p> <p>○認知症状が進行しても本人にとって環境を変えず、ご家族も希望すれば出来る限りの暮らしを続けていけるよう努力する</p> <p>○スタッフの働きやすい職場、協力性、和を重視し、職員の交替がないよう努力している</p>
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>・地域との日常的な交流が出来ており、事業所の災害対策や外出支援、馴染みの関係の継続に繋げている。</p> <p>・事業所内でのコミュニケーションが取れており、職員の学びの意欲を、管理者や職員の協力で資格取得に繋げている。</p> <p>・地域性や自然に囲まれた立地環境を活かした、利用者支援が行われている。</p>
--

・サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 該当するものに印	項目	取り組みの成果 該当する項目に印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「安心・安全・交流」を理念としている スタッフ全員がそのことを理解しており、日常生活の中で共有できている	「利用者と家族の安心」「利用者の身を守る」 「地域との交流」に視点を置いた理念の実践に努めている。	
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	13年目に入った今、地域の方との付き合いはごく自然に出来ている 近隣は戸数も少ないが日常的なかかわりもあり、お互い様意識も高まっている 野菜等の差し入れや購入も地域の物を使っている	過疎・高齢化の進む地域で、事業所開設以来、専門職として独居高齢者への声掛けや、事業所行事への誘いを継続しており、野菜のおすそ分けや外出行事での交流が行われている。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	大きなことはしていないが、1人暮らしの家を訪問したり、地域に合った取り組みをしている 看護学生の実習の受け入れ等は積極的に行っている	/	/
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議の内容は、利用者の現状を報告すると共に現状に合わせた取り組み方法を説明したり、又アドバイスをいただいたりして、より良い方向性を見出している	運営推進会議の資料は管理者が準備するが、進行は、利用者家族が行い、事業報告や委員からの情報や高齢化などの話題が提案され、意見交換が行われている。	
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議(2ヶ月に1回)の時には状況を説明し、報告している それ以外にも利用者の変化や相談事等は連絡をとり、指導を仰いでいる	市介護保険課、包括支援センター職員が、運営推進会議に出席している。防災についてのアドバイスを受け、補助金により、スプリンクラー取り付けを行っている。	
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	基本的には拘束しないという事はスタッフ全員が良く理解している しかし生命に危険が生じる重要な結果が生じる場合は必要最低限で行う場合もある	身体拘束の弊害を職員で話し合い、帰宅願望のある利用者の背景や特徴を知ることによって生活支援の工夫に取り組んでいる。地域の協力を得ながら、安心・安全な暮らしの支援に努めている。	
7		虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	認知症高齢者ケアについて学習し、虐待などあってはならないことをスタッフ全員理解している 言葉一つにしても、振り返り「今の言い方悪いよね」と注意し、反省できる環境にしている	/	/

事業者名: グループホーム花の里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	勉強会にはなかなか参加出来ないが、必要性があれば関係者と話し合い活用できるよう支援している		
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約や解約・改定等の際は、十分な説明をし理解してもらっている 又、質問に対してもていねいに答えている トラブルの発生もない		
10	(6)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会の折には何でも話せるような雰囲気ではあると思うが意見・要望は少ない 玄関に気づきノートを作成して、自由に書いてもらう等もしている 又、アンケートをとる際自由に書き込むようにもしている	家族会としての形を取らず、利用者と家族が楽しく集まる機会として、春祭り、夏祭りなどのイベントを開いている。 運営や利用者支援に活かす為、事業所独自のアンケートを年1回実施している。	
11	(7)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者・管理者・スタッフとの間に垣根がなく、いつも自由に話せる雰囲気がある	勤続年数の長い職員が多く、職員間のコミュニケーションが取れている。 また、運営や利用者支援について意見や要望を出しやすく、資格取得の理解もある。	
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	頑張っている人は持続できるよう、又、経験の浅い人は更に頑張れるよう、何と云ってもやりがいを持って働けるよう、いろんな場面から考えて、不平・不満が出ないように考えている		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修会や講演等、出来る限り出席してもらい、知識や技術を身につけることを進めている		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者や由布市内の福祉の事業所の方との交流、ネットワーク作りを進めている 由布市が作っている「あらかし」もその一つである		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者本人の状況、様子等を十分に把握した上で、本人の気持ちを尊重し、受け入れるよう努めている 最初の出会いが大切と思っている		
16		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の困っていること、要望等を聞き、協力出来る部分はお願ひしたり、出来る範囲で負担にならないよう、双方で利用者本人の安心・安定につなげていく		
17		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用者本人と家族の思いが、当ホームが適切なのを見極めるために試験的入居や半日過ごしてもらうなどの対応は可能である		
18		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な雰囲気の中で共に過ごすという本質的なことは充分理解している その中で重度化したり、高齢化してきているものの現状で本質的なことは出来る限り保っている		
19		本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会の際はお便り・ケアプラン等を通じ、利用者の状況、家族への思い等聞くことが出来、家族と共に思いを一つに支援出来ている		
20	(8)	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や親戚の面会や電話での声のつながり、又は近隣の方の面会や話の話題にも大いに利用している	発語やコミュニケーションの取りづらい利用者にも、電話で馴染みの人の声を聞かせるなど、関係の継続支援を行っている。また、事業所での生活が長い利用者は、職員や地域との新しい馴染みの関係が生まれている。	
21		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	全介助レベルの方とほぼ自立に近い方と二分しており、スタッフは力がどちらにも偏らないよう、出来る方にはリーダーシップをとってもらう場面もあり、聞き役になってもらったりと持っている能力は引き出すよう努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	終末ケアまで行っているため、ほとんど死亡退居という形である。それでもご家族とのつながりは保っていたり、行事に声を掛けたりもある 他の理由で退居になり、継続性が必要な場合はそれに努める		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	スタッフのかかわりを担当制にしてからは、より利用者本人の思いを理解出来ていると思うし、ケアプラン等にもそれが反映されており、家族とも話し合いのもと、より良い支援が出来るよう努めている	担当職員が「認知症のためのケアマネジメントセンター方式」を活用してアセスメントを取り、気づきがあれば、その都度加筆し、3ヶ月ごとに、見直しが行われている。	
24		これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	その人の生活歴を含め、充分知ることが良いケアに通じると思っているが、本人にしてみれば知られたくない過去もあるかも知れない 難しいことではあるが、ケアとプライバシーを守るということを常に考えておく必要がある		
25		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	重度化が進んでいる中、過ごし方も様々で、その人にとってどのような一日の過ごし方が良いのかを常に考えている。持っている力は維持・向上出来るように努めている		
26	(10)	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の状態を担当者を中心にスタッフ全員と意見交換し、ご家族にも説明し、思いや要望を聞きケアプランに反映させている	利用者や家族の思いを本人の言葉で記入し、介護計画に組み入れている。サービス内容は、具体的にケアに直結した内容で表現され、実践に繋げやすくなっている。	
27		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	生活の様子や身体の状態等記録は出来ているが、気づきや利用者の言動をスタッフはどうとらえて次のケアに、又ケアプランに生かすことの記録(大切な部分)が抜けているので今後の課題であると思っている		
28		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	基本的に家であるということから、利用者のために良かれと思うことは、家族の出来ない部分も補っているし、いろんな事に柔軟に対応出来ている。ご家族の負担は最小限にしている 面会の折には一緒に食事をする事等よくある		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣の方の面会や地域包括支援センターの職員が運営推進会議に出席していることもあり、情報交換が出来ることでより良い暮らしに結びついている		
30	(11)	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の継続は維持しているし、専門外の診察が必要な場合は、家族と相談の上本人の状態と合わせ、紹介してもらっている。受診の際は必ずホームのスタッフの付添で行っている	受診は、職員同行を基本とし、家族付添の際も職員が同行している。協力医との連携が取れており、緊急時の相談や対応もスムーズに行われている。	
31		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員の配置もあり、常に利用者の健康管理を行っている。介護職との連携もとれており、急変時や終末期においても慌てることなくかわりが出来るようにしている		
32		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	骨折やその他の疾患で入院した場合は極力早期に退院が出来るよう、担当者と話し合いを持っている。環境の違う場所が認知症状を進行させることは理解している。入院中も面会に行き、なじみの関係を保つようにしている		
33	(12)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期の対応については、医師・家族・職員とよく話し合った上判断をしている。ホームで出来る医療とケアを十分に説明し、同意書を頂くようにしている。「ここで良かった」と思ってもらえるよう努力している	複数の看取り経験がある。協力医、看護師、介護職員の協力で、重度化、終末期の利用者、家族が共に、穏やかに過ごせる支援を行っている。	
34		急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	多くの経験からスタッフは急変時や事故発生時の対応を心得ている。先ず何をすべきかという事、何が大事かという事、又年に1回消防職員による救命講習も受け実践出来るよう努力している		
35	(13)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練を実施しており、防災設備も慌てず作動出来るようスタッフ間でも確認したりしている。「火は絶対出さない」というスローガンも掲げたりと、災害に対する意識付けをしている	災害時の協力者の消防団や地域住民には、事業所内の居室や配置を熟知してもらっている。また、地域に災害を知らせるサイレンを、事業所所有の緊急を知らせる「半鐘」をならず取り組みを考えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	排泄介助時の声掛けや介助方法等、特に注意を払っている 慣れ慣れになってしまいがちなところを注意しあったり、又会話においても子供扱いになっていないか等、ケア会議でも議題にして話し合っている	利用者と職員との親しい馴染みの関係が築かれる中、呼称を「さん」付けにすることに決めたり、職員間で不適切な発言に気づきがあった際は、職員同士で注意し合える関係づくりが出来ている。	
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	高齢化・重度化が多くなっているが利用者の担当制にしてことから、より深くかわること何を求めているか、又どのような状態なのか考えるようになり、喜びや安心につなげるかかわりを目指している		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	重度化が進み、何かをするというよりは、どのように過ごす方が安楽なのか、一人ひとりにとって考えている 元気な方には希望を聞いたりしながら、出来るだけ本人の気持ちに沿うケアを考えている		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	花の里の目指していることに、「いつも身ざれいで嫌な臭いがなく生活」ということを掲げている 整髪や爪切り、耳垢等注意を払っている 又、その人に似合う服装も心掛けている		
40	(15)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	全介助者が多くなっているため、一緒に何かをすることは難しくなっているが、一緒に食事をする事は心掛けている 同じ物を同じテーブルで話しながらも介助には充分気を付けている	管理者と利用者と一緒に、スーパーや産地直売店で食材を購入し、利用者と職員で献立を考えている。近所からの差し入れの旬の野菜を豊富に取り入れた手作りの食事を、利用者と職員が食卓を囲んで食べている。	
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	その日の体調に合わせた食事や嚥下の状態、体重の変化、好み等、一人ひとりの状況・状態に合わせた食事になっている 一日の水分もチェックしている		
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを徹底している 口腔ケアが肺炎予防につながることも学習しており、歯科医による講習や歯科便りも役立っている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来るだけトイレで排泄が出来るよう一人ひとりに合わせた援助をしている 誘導時間やパットの種類も時間によって配慮している 廊下やトイレ周り、衣服等汚さなくて良いように見守り・一部介助している	自立の利用者にも、トイレ使用後の処理や声掛けに注意を払っている。排泄が、不安な行動の引き金とならないよう、利用者の動きや表情のサインを見逃さないよう努めている。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	薬に頼らず、食事や水分摂取等で自然排便があるようにと思っている ストレスも大きな伴びの原因と考えているため日々の過ごし方やかかわり等気を付けている どうしても運動不足になっている		
45	(17)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	全介助レベルの人が多くなっているが、一人に時間をゆっくり取り、コミュニケーションをとりながら入浴してもらっている 一人で入浴する方はマイペースでゆったりと自分流に入ってもらっている 声掛けも忘れずに行えている	一般のユニットバスの利用である。身体機能の重度化で浴槽に入れられない利用者も、脱衣室で脱衣し、浴室に入り、掛け湯をすることで、保清と入浴を楽しむ支援を行っている。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	高齢化や状態によってベッドで横になる時間が多くなっている方や午睡もしない方等、一人ひとりの一日の過ごし方を考え、夜は安眠出来るように努めている 夜の過ごし方や眠剤服用の方も利用者に合わせて行っている		
47		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の目的や副作用も職員に知ってもらい、気を付けている 症状の変化に気づき、医師や看護職員に知らせるといことは徹底出来ている しっかり内服したかということも確認し、内服薬の重要性も理解している		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	重度化している中でも、何か出来ることはないか、又楽しみや笑顔に通じることはないかと常に考えて、スタッフ間で話し実行につなげている 元気な頃の仕事や趣味を生かしたかかわりを行っている		
49	(18)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	体調に合わせてドライブや年に1、2回地域の方と合同で梅見物や花見等行っている 家族の方との外出もしている	介護度の低い利用者は、職員と一緒に、食材の買い出しに出掛け、介護度の高い利用者も、車いすです事業所周辺で外気浴をするよう努めている。ドライブの際、同行する地域の人に車椅子移動や利用者の見守りの協力が得られている。	

事業者名: グループホーム花の里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在の入居者の中には希望する方はいないが、今後希望される方が入居した時は、必要性は理解しているので支援していきます		
51		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	時々身近な方に電話して、声を聞かせてあげたり、会話できるように支援している		
52	(19)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	昔ながらの木造の家屋で家庭的な雰囲気を大切にしている。利用者や職員も同じくらい長く、馴染みの関係も出来ており、ごく自然な形で生活している。職員の声のトーンや不快な臭い、テレビの音量には気を付けている。季節の果実や花、又貼り絵等で季節感を味わってもらっている	既存の住宅をグループホームに改築し、開設から13年が経過している。利用者の介護度も重度化しているが、共有空間は不快な臭いもなく、職員により清潔に保たれている。	
53		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	狭い空間の中でもソファを数か所に置いて、一人になったり、面会の方が見えたりしたら、話せる場造りをしている		
54	(20)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族との思い出の写真や孫たちへの手作りの作品等貼ったりしている。ベッド等は状態に合わせ、使いやすい物にしたり工夫をしている	利用者の居室は、職員が掃除や片づけをして、安心して過ごせる居室づくりに努めている。相部屋の利用者もお互いに落ち着いて過ごせるよう配慮が行われている。	
55		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	状態に合わせて部屋の位置、ベッドの位置を考え、出来るだけ本人の力で生活できるように支援している		